

和書
東海記
函
五

庫 文 閣 内		
一七三函	三一五八九號	和書類
四架	一〇冊	

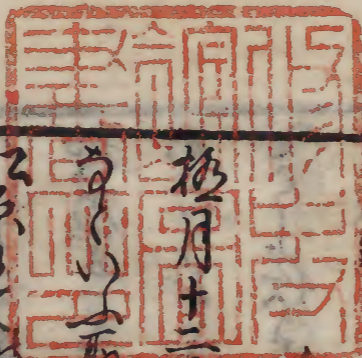
内 閣 文 庫	
番 號	和 31589
冊 數	20 (10)
函 號	172 86



東遊記後編卷之五

白取川の風景

南谿子著



極月十二日名傳なつたつと和賀五小松の城しろに立たて安宅やすぢ藤系ふじぐさ
 ありててく是こゝに樹いるうゑりかき流ながす小松こまつより藤系ふじぐさ八分はちぶんの
 松系まつぐさにて飯い海うみを要よるり付つ北きたの事ことなりしひはけ安宅やすぢまでい流なが
 とりてり乃すなはて雲くもをくりぬりて口くちをくりて来るくる程ほど小松こまつのしくく程ほど
 志こゝより風かぜをくりて烈あつくく霧きり生なむといふいふふ亦またもも小松こまつをくりて流ながす
 一いつらと水みづかかかの幹こゝろ木のたけをくりて雪ゆきの事ことなりしひはけ安宅やすぢまでい流なが
 小松こまつ生なむと水みづ流ながすのしるるもも小松こまつといふいふふ大おほいいのしりて川かわ系ぐさ幅ひろ
 さま里さとの中なか七し筋すぢ八はち筋すぢの川かわ流ながするり出いづい吹ふくくははいい小松こまつのしりて

東遊記後編

那^うに^ま進^まり^した^りと^して^しる^人あ^しど^もさ^るに^は極^めの
る^にも^は日^々苦^しみ^入り^しり^しる^にや^して^しる^に極^めの^に極^めの^に
の^事ら^のり^ん勇^気に^振り^け川^系と^う越^えて^やる^にと^して^しる^に
が^らり^てを^飯お^もい^食い^てる^にと^して^しる^に禮^儀合^時極^め合^時極^め
之^重き^に着^て一^極川^系と^う越^えて^しる^にと^して^しる^にの^烈あ^まは^らる^にと^して^しる^に
ハ^氷で^て矢^のと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^に
神^役と^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^に
極^めの^に極^めの^に極^めの^に極^めの^に極^めの^に極^めの^に極^めの^に極^めの^に
と^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^に
と^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^に

八分^計と^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^に
佛^さり^の子^をと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^に
答^へん^とと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^に
養^老院^とと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^に
何^らと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^に
者^らと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^に
こ^のハ^コロ^バと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^に
旅^の人^とと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^に
一^とと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^に
今^抱と^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^にと^して^しる^に

百人集 巻之五 後

足ふ叶おのりさしわこす好きる福小想才大に推ひおつ流
新ましく驚きうらうら海より志と抱き業深ゆひ火そのわが
わろくもろくくと命抱して難あるは食をじむ時計たて
かりくかきまき働さきを廻すも清小精神とほるまか先致
まじまじ成りひふまけ初とがし安徳ちり身とまのいすま
は川あまそは旅の人毎本まあなごい言吹小倒るこすわり
今らまきふふみなりと目きたしとま世あ不違ふす人こまおと
うらまふふとままを初とかり小成りて厚く謝礼致の
け次ういのかの所あさの拍舟あさといふ浮舟泊りうらう服業とまえ小舟まえ積業小
復うしうとく二日餘還る保長とくまう小舎う澤小入うり初と

此の言吹小違ふ命はうらあんとし其あらしとま本成と
まり初の初ういのかの言吹危あささあふ見とらうもほは五福小しと余
い既小死あささんとせり余幸小除あさんあさと氣は保則あさふあさしあさとも天稟
虚弱あさの身あさは保烈あさあ本小あさ成りことわさしは言吹あさはま氣と
かあさ怯あさひあさまあさとも才あさ積あさ充あさ実あさしとままあま二年あさの福あさ中あさ令あさ
恙あさあしとてわこの危あさ嶮あさは後あさより減あさ小あさ花あさは南方あさのくれ
伝あさしあさかあされあさのあさこあさまあさりあさま

床下の聲

越前国結江の近邊新庄村小百姓の丸の下とて何おの
あああそこのいよこの早稲と家内あさの男女あさ大あさにあさ好あさりあさ

志小麻板と引ぬぐにふら何ゆと刀とど又麻とささ人
おふ時とのりむくも床の下より早糸す後大村申の
はとまりなき者共毎夜大勢あり集り色くの事といふ
小若く床の下小てと早糸とよりおのこハ古狸(古狸はか
とハ狸(たぬき)との)ずといふ然るに梳(む)るるべしといふは梳(む)り
わらうといふ猫(ねこ)のいふお若くすといふ麴(かまゆ)の若(わか)し麴(む)麻(あ)麻(あ)
かじ色くの者成りお何とて同(な)いおはきさものたづ
や言(こと)小(こ)若(わか)くハおのまハわさ梅(うめ)りぐーといひ小(こ)若(わか)る(る)お
條(じょう)りといふともしもがさ燐(りん)化(か)物(ぶつ)と異(い)名(な)して生(せい)を(を)さ
大(お)津(つ)判(はん)小(こ)成(なり)きりけ申(ま)城(しろ)小(こ)津(つ)火(ひ)き小(こ)津(つ)怪(かい)のりぢりて

吟味の役人大勢あり一夜に家を居て試る小何のあつた
役人ゆきいす舞(ま)夜(よ)ハ又(また)おわりて流(なが)くのりつ小(こ)津(つ)火(ひ)き
毎夜役人あつてしよを其(その)身(み)あまら夜(よ)もさなとむてさす故
おせんといふてま申(ま)申(ま)小(こ)津(つ)控(か)ま(ま)りを月(つき)びらりてまはら
何のあつたをげく怪(かい)事(こと)ハ止(と)まらり何(なに)の雨(あま)着(き)といふこと知(し)
まいつてやまといふといふこと無(な)くつらつら流(なが)りぬ
飛根の味指
出(いで)玉(たま)村(むら)田(の)城(しろ)の糸(いと)遠(とほ)既(い)小(こ)津(つ)煙(えん)地(ぢ)小(こ)をさ小(こ)露(ろ)花(は)根(ね)を
といふおのりけ遠(とほ)津(つ)煙(えん)地(ぢ)界(がい)よりあすて山(やま)の流(なが)り川(がわ)の流(なが)り
頗(た)ら要(い)害(がい)の地(ぢ)取(と)り扱(あ)る小(こ)津(つ)火(ひ)きとあまきくすりて或(ある)

東遊記 卷之五 四

川と云ふ小交戦々お山おあし或は教里一中小尺もついで
 皆心のと云ふ平として古原の山麓と云ふ所も此所の
 城治小交戦々て地面を廣くして十町或十町小連たり或は中
 小一山之く四面山の傍境のくく然るもあり或は心連で居せ
 して或は通河の道と因るもあり此の傍を皆と平す
 くと他もて山頂にすうしたるりのくまはの心の築まわら
 といわたりそはく城治少々と云ふ不知との事又古書
 傳記といはれり小かく廣大の城郭と稱人住たりくとす
 うとむ記に云ふ上古飛夷と云ふと徳府と云ふやうも
 見えし何れもせしと云ふと昔一たるの豊臣太閤さとの千

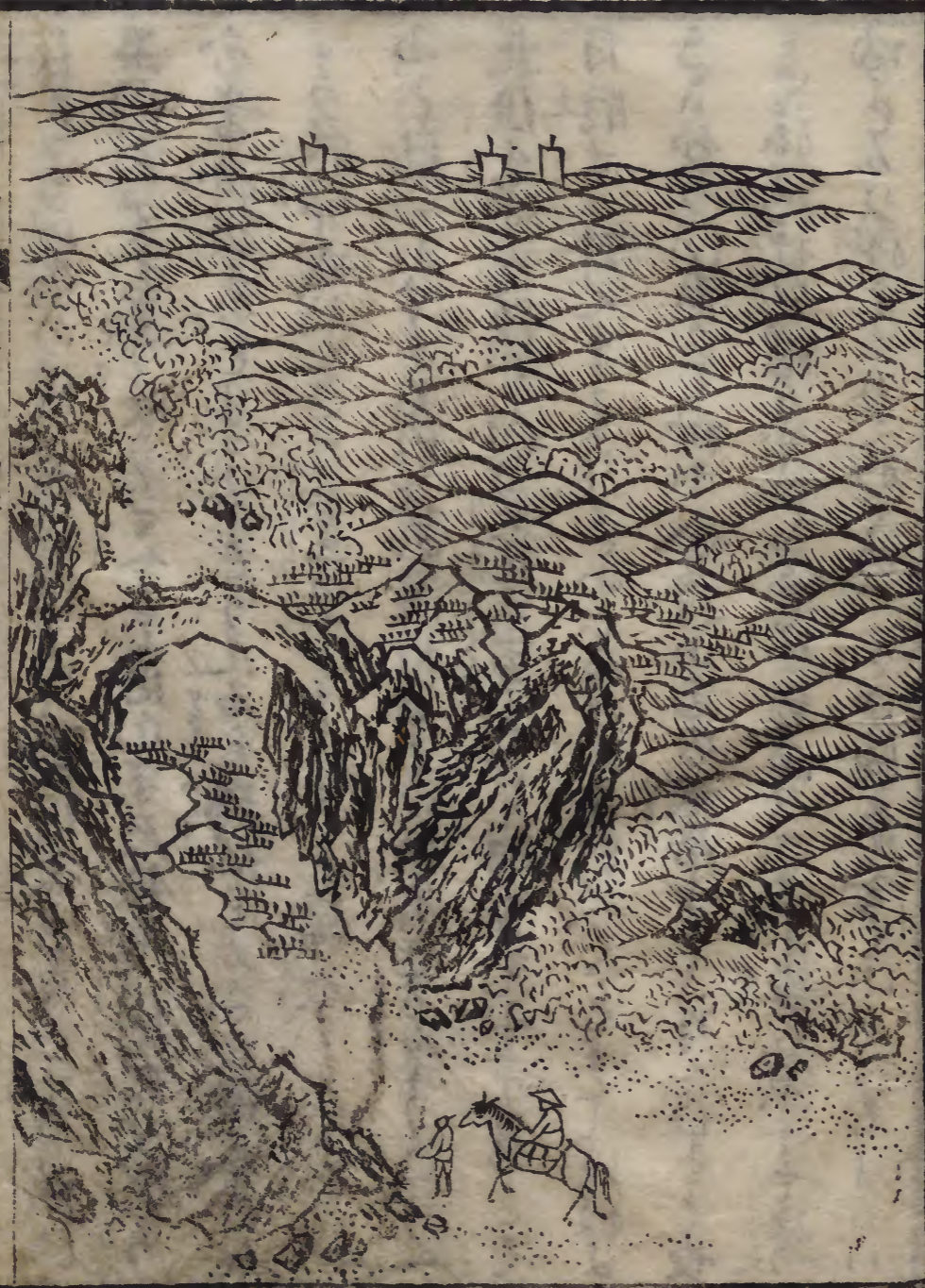
倍おと云ふ一日本古今いささく人てすそ格千ふ上古の世
 番夷の住たり耐彼人小格々の豪傑のつてかくのくくくく
 なきくいゆく事の江戸の博物のく小尺とい考する所との
 らんやそと人の治法さるあさしがきつとらう又は物地小く
 後々美の心の小京城治のりそと飛根さとのくく一城に
 前ハ大何てまうう美倉の社或は城ののりさく崖地とありて足
 山は城治と云ふの名も古城ののり格別小大がれも
 飛根のくく教里小連り四方小くびこまりおあはれ
 松小くぬまは十分りぬも足らずい鏡り因はく人の城治
 くとく所の考ふ為る小是と何くといふく一城知志は

町の人も山城の計をいふる今小幸一り方徳等程くの
兵と堀と申多しとみらるる小三四年の五百年の
いごごうん事代文華をいふとい書はるる人もききあはる
あはる事しとて

舍利漢

奥州外濱小ホロギといふ所を此海を小舍利漢の
小石濱がらぐま申小舍利漢とて白さわり路色がらる
大ラ豆のとも米粒のとも明徹滑澤を愛すへし此と通
り一日の天氣は小初まりしは漢も小座り舍利漢と
むらひも樂り回風使りの若林は舍利漢に似たりはたき

するがらりり付ふ奇がらるる此漢の磯とく海中小座り申同
法の舍利漢もあはれ舍利漢もり常く舍利とてなりし
舍利とちくは漢小歩のげた今絶す此は小舍利漢
とくま舍利漢も水面より今絶す此は漢とて遠く見
しは是の漢もれぬ海に没入してまはれまはれり
取のがらる事しり此は舍利漢もて得りまはれ願
ふしと珍敷あはれまはれ余と指の此程の舍利漢もり
功もりま舍利漢の色は海にまはれぬの化したり
してま中米粒のごとき小舍利漢もり誠小幸
ありまがり又は舍利漢のまはれ今別といふ所なり



伏見松堂



隔より世の候と瑪瑙漢といは候小入る前夜小自然の
石門ありて奇境ありとも肉丸すれ餘瑪瑙石の候より
む常体の名とすまじとさう凡石と瑪瑙と大さ大僧奉の程
より鶉卵或ハ小ハ蠶豆のごとく皆く明徹して赤珠
小と候ノ小するもの之葉津屋と云ひ又ハ寶石ともいふ人
馬姓多する候がハ是元玉石と云く候小見光小きつらりて
目眩する計とさうりとも小ありとさうりてと見え候程よ
こハ心あり取て神小入る程小あのかんざり計にらと長
き旅海移入るつて毎夜こら四つづく小奥へ京とて候
ゆもハ候もつりこかくのつとさ候京をく小のありハ

守らんと候交門に杯えのつてみたり小入る事たしも海に
しとさかろ人き遠地りし道り人の取小任せ候き人林
ずり老り先つととと地りり

洞山

出羽小田原城下より東北の方を道とてゆく十八里の所小
阿仁といふありは此所に洞山のやまありけりより移る洞と
おとろへ堀入穴の中とせきナイといふと奥原く堀入る
へ入る者皆サレ殻小地成りり持入るなり扱殺十町奥原く
堀入り世界の風を通りてるやと色ハま煙火すちま
まゆりし煙火きゆまなくと亦呼吸のき息たらまらふ

絶く死するに由る不始火に由る所不始色ハ急小逝ゆりゆり
そは事然等事小大考ふ必なる事一そ人の死生物の生
の如と云へ一余は此宛の中不令試んと欲せしども志論
此は後十八里其に位米の人若しつと云く此宛の中ら金
石の毒氣のりて他邦の人常々まき別る方太毒家おたり
死する者ありといひ又其の禁制中く旅人等いふら不廻
のりち徘徊する候許さ色ハ毒播とて一の右のらく奥
深く入るに死すれども又奥深く掘りて入らて時々の附
ら宛の小くう下不掘伏せ風氣廻るやうして幾十丁
あくも入るは是は風廻りとも云くのがくくして入るは何程

入るくも妙然とありゆりくくも死するやうに云ふは
用紙初くくまかいた何にのらと京の岩緑青孔雀石とて産
す後石業の所は皆くの瑞きま一イケ杯も果た大なる
のあしつたり

廣徳寺の門

東林下谷小廣徳寺と云る禪院に門格あふ大なり
門もわび又彫琢の工と格とつやまのりたるは
東郊の人等とて口をまも座の門くくし今
てこのふ系杯のまう不始とて使ふし一寺町の
まくの門も是程の門もま一ゆくと同ふと云のた五

他有りといふも後形主人の書し新嘉治とありにけ
 門の事以熟なり後形主人の書し新嘉治とありにけ
 孫年中東嶽山二品法親王の目録草紙多法とせり
 中々寺法寺の形とせり中々寺法寺の形とせり
 門と後形供奉の人と曰一寺の名を因とせり
 啓一の形山の後形山は後形山は後形山は後形山
 寺の大門は遠く由後形山は後形山は後形山
 出入り大寺と小寺とありありありありありあり
 人の大寺と小寺とありありありありありあり
 大寺の成就の形は遠くありありありありありあり

寺大徳といふも後形主人の書し新嘉治とありにけ
 寺と後形主人の書し新嘉治とありにけ
 乃い同殿の二匹とせり後形主人の書し新嘉治とありにけ
 み形一の形山は後形山は後形山は後形山
 門形山とせり後形主人の書し新嘉治とありにけ
 寺と後形主人の書し新嘉治とありにけ
 てありけ大門の形山は後形山は後形山は後形山
 業ふもありけ大門の形山は後形山は後形山は後形山
 いうわく後形主人の書し新嘉治とありにけ
 尺の形山は後形主人の書し新嘉治とありにけ

の向きくわりの落度大隅日向の地いもふわつて最暖氣の
 向くを求めの地いも方角ふしりて全くまきあわをまれ
 ぬき地いもりさるる深谷とくとも三冬ふりりて方角
 うちすし又人家ふ火燧といふものさく足袋靴中の火用
 ろふ石火をハ天氣書小晴朗して風亦強うくそは古ふ
 冬もまき熱をば地味地地地地の四時さう亦草舟は冬小
 舟一藤茨蘭のれと月生とのさう人家のたすもあは
 せくくねまをばあやうら笑花のや梅と庭をまは
 せふあうくむきくあをたさきふんくハ梅あましく
 柑欄於服内皆実のち松竹く葉ふあはせふまきりてさる

山深谷の四時書ははみハ水柱の落ふくづりく水晶屋の
 こくく氷厚を堅くことむのどく大行を流とくとも皆
 氷りく車馬水上と性あすけゆ急小足袋靴中冬春の二
 季ハ志がくくええさずがうハ火燧のちけく守圍燧裏を大
 小してる夜寒小火とたく又九十月のはり春三四月
 のはまてい毎日毎夜天氣曇りあうらざれは海霧あつ水
 風まきく葉小烈あして面肌むく愈うくとは風小杖あまき
 虫はくくや夏えまがー草舟は皆を白くま寝れも南方よ
 さいまのや竹はくや松と又ま梅のり梅梅地は秋首跡
 利も孝石榴杯香清くは必開くゆふ小言四五月のは小一極小花

暖なり梅はあふあふと花咲くとてと花咲くとてと花咲くとてと
東風の梅はあふあふと花咲くとてと花咲くとてと花咲くとてと
氣候のお遠びくのぞくもけいふふふふふふふふふふふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
巖石堅剛なる由志山嶽ふことしてその峰えはふ懸して
海は深し越中まきの沖は深き海ありといふ旨尋の條
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
いふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
海深き由志山嶽なる由志山嶽なる由志山嶽なる由志山嶽なる

日本の内一とて南方の山は根よくて巖石高く樹木茂りて土は
土はかろのそとくもまきの風の氣も烈柔のお遠わりの獸北方は極
悪のもの多し海潮の波も山方のもの小懼悍のきあり毒も
お毒ひるもの山方より掃きて南方小多し只中部の地は四
時の氣候あつても終る中和のきとて文はく烈柔の偏る
おおひふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

名山論

余初ら山水と好み佐那のく小多しは必老と大川とやま皆
各々おおくの山川城自發して天下第一といふも伝へる
既小天下城なりといふも城はもとて論するふふふふふふふ



けしきも白くして白雲と成りて雲霧をうきうきと見せり
と又心の海の小島海に月と星散らし雲霧をうきうきと
巖より岩まで出雲の山々も出雲の山々も出雲の山々も
双つて雲霧をうきうきと見せり
最峻峻なり日光映るる所の山々も出雲の山々も出雲の山々も
うきうきと見せり
大抵海内の名山を記す事あり其の山の奇絶又別
小書あり今此の山々を記す事あり其の山の奇絶又別

秋光

秋光の文ありて秋光の文ありて秋光の文ありて秋光の文ありて

大昔のとき金指花散るといふのとき後所治種といふのとき
一峰の山ありて山ありて山ありて山ありて山ありて山ありて
の秋光の中ありて山ありて山ありて山ありて山ありて山ありて
け秋光の中ありて山ありて山ありて山ありて山ありて山ありて
と宿願ありて山ありて山ありて山ありて山ありて山ありて
と山ありて山ありて山ありて山ありて山ありて山ありて
古くありて山ありて山ありて山ありて山ありて山ありて山ありて
山ありて山ありて山ありて山ありて山ありて山ありて山ありて
と一夜ありて山ありて山ありて山ありて山ありて山ありて山ありて

るり由系義經は後の堯の耕也と今小傳へくるはこゝに於
けり余彼をこの小傳に堯の耕也より大すては小
て傳りむすまらるむをいふとれは堯小ききとのふわは余
傳りての考す小日本神代の此の耕也の具なるべし同
たらむとあ方のもふむとて田細と耕とあるべしと
其後せ小むらへん版と世習しこくぬり耕也もせりこく
りしり便利なるも版考あし其のこくすりしり
本の柄と付て今の耕となせりしり今この耕も本の柄
とありけりハ耕也よぬ之耕也才一の具しては食飲食
の根本とむらよの由系雙利の神代のゆゑは此物とこ

むす密として貴なりと版表人のたむしりしり
わしどあしり日本人の突とすりむと貴と物と伝へて終小女
之版中計と版表は今小傳にむら版とすり居るるる
ハ音より田細なり耕也とてあはれは貴なる耕の事由ハ
いふよりむすむらとて反而今小傳に居るり日わハ耕也の才一
なるも今今の耕のゆゑ便利なるを考へてはハ不便
利なる大昔の耕ハ皆進る小女とて今のヌキ耕と
たらむ人昔の耕先日本もそむら版と居るるるなりす
く日本ハ版神ののどくはしりたうとめはゆ念ハハ
陽く日本ハ古も版掃くも教百千年持傳へるる

一居る之刀劔の具目舞踏の形或は高松の漆器を以て志趣
飛して室おとや居る之は皆日か古代の伊豆おとや
小幡地へ行くは依今小幡地一居るもの之は素衣眼を以て
形作を伴うたもまわらば又満州鞆地ら返り来たる也
ものいふ日かより昔旅書地へ入るは今又聖王一毎る再ひ日
本とてま守する事あり是等の形を考へ今も小幡地を以て日
本時代の耕作の道をうつる疑ふべし相夷人いひるは亦
これとて愛おとよとては中とといふは或は人々争奪し又の鬼と称
過と申すたの附書也二品二品或は二品四品と衆の控まふよりて
是れ出づる興とていびる事ありいふやうなる衆とてと愛おと
出といふ令と助らうとて身と保つ事ありとて居小おとて愛お
城愛するくま中おかの琳芝を以持つて入る家も帳夷地も亦
形とて明白おとやとて又柱お小まおあつる愛おのりおとてけお
と持する家いよおの頼とて作らる程のる亦小幡地はよるもとに
いふとらなり

地氣

天下太平の氣いゆるりして事あり今も又地氣あり那古の
氣清くして觀るの度老小おとて眼を以て小幡地も亦総の海産
く西の伊豆の岬まで月を以て見候し是れを面白うとて思ひ好く
存してかろ居るより一亦亦の老く信小おとて四方の海産

天正十一年二月

ちふふ老いしやう相と天地は不思議なるものなり其初
 時より海は深き小舟の舟りしふまに世は深き下ま
 へ海は深くは深きと舟りし小舟の舟りしやう
 一ふみは陸地より舟りて深き舟りしやう
 せり足の人海を二十十計も隔る舟りしやう
 いかげ舟りしやう海を隔る舟りしやう
 とねまは海を隔る舟りしやう
 時ふ揚州なる舟りしやう
 るふは海を隔る舟りしやう
 をく舟りしやう

星のふらうとあす天下を奉る瑞なりよふ宗物の本
 の事小邵康節先生著と海陽の天津橋と小杜船とゆめく
 惨然とる客舟の舟りしやう
 とあす海を隔る舟りしやう
 まる邵公回天下を奉る舟りしやう
 の事わつしと今我が舟りしやう
 舟りしやう
 りふふ舟りしやう
 りふふ舟りしやう
 りふふ舟りしやう
 りふふ舟りしやう

西遊記後編嗣出

寛政九年丁巳正月

大

佛

系

帶

安

殿

京都寺町通松原下

勝村治右衛門

大阪心齋橋通安土町

吉田善

藏

書肆

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

